

治療を受ける乳がん患者の各世代の思いや経験から考える ライフサイクルに応じた看護支援の検討

布施 恵子¹⁾ 茂本 咲子¹⁾ 斉木 良美¹⁾ 渡邊 真子²⁾
脇田 久美²⁾ 羽生田 江里²⁾ 奥村 美奈子¹⁾

Examining the Nursing Support According to the Life Cycle Considering the Thoughts and Experiences of Each Generation of Breast Cancer Patients

Keiko Fuse¹⁾, Sakiko Shigemoto¹⁾, Yoshimi Saiki¹⁾, Masako Watanabe²⁾,
Kumi Wakida²⁾, Eri Hanyuda²⁾ and Minako Okumura¹⁾

● 要旨 ●

本研究の目的は、治療を受ける乳がん患者のライフサイクルに関連した経験や思いを明らかにし、ライフサイクルに応じた看護支援を検討することである。

治療目的で A 病棟に入院した 20～80 歳代の乳がん患者を対象に質問紙調査を行い、30～60 歳代の各年代 2～3 名には面接調査も実施した。

30～70 歳代の全ての年代で『仕事について』の困難や調整の必要性をあげており、30 歳代では治療と仕事を両立させる方法を模索していた。40 歳代では『子どもについて』や『家庭について』、50～60 歳代では親の『介護について』の困難や調整の必要性を感じていた。【術後乳房への思い】は、子育てと仕事を両立させながら生活することに必死である 30～50 歳代では具体的に出なかった意見であるが、60 歳代であげられており、自分の身体や健康に気持ちが向く年代であると考えられた。『遺伝について』は 40～70 歳代で困難や調整の必要性を感じており、60～70 歳代では【子どもが遺伝について心配すること】があがっていた。

患者のライフサイクル上の課題や対処法を意識しながら患者の生活背景を傾聴し、ライフサイクル上の課題に応じた情報収集や情報提供を行うことが、ライフサイクルに応じた看護支援となり、複雑で多様化している治療を受ける患者に対する継続看護に繋がると考える。

キーワード：乳がん患者，ライフサイクル，看護支援

I. はじめに

女性の部位別がん罹患率では乳がんが一番多く、年齢階級別罹患率は 30 歳代後半から急激に増加して 50～60 歳代でピークを迎える（国

立がん研究センター, 2021a)。乳がんの治療法は、患者の病状、嗜好、背景に応じて、妊孕性機能温存、遺伝学的検査、乳房再建、分子標的薬を含む薬物療法の検討などが可能となってきており、複雑で多様化してきている（国立がん研究センター, 2021b)。乳がん確定診断後、妊孕性機能温存や遺伝子検査、乳房再建術などの説明を医療者から受けた患者は、今の自分の生活の状態を何優先

受付日：2022年9月26日 受理日：2023年2月6日

1) 岐阜県立看護大学 Gifu College of Nursing

2) 岐阜県総合医療センター Gifu Prefectural General Medical Center

してどのような医療を受けて治療をすれば良いのかを考える必要がある。

近年、女性のライフスタイルは大きく変化し多様化している。令和3年の年齢階級別女性雇用者数は40～54歳が多く（厚生労働省, 2021）、女性が社会進出して労働者の役割を果たしている年代と乳がんの罹患率が増加する年代が重なっていることに加え、乳がん罹患率が増加する30～60歳代は結婚や出産、育児、退職などのライフイベントがあることから、乳がん治療がライフサイクルに与える影響は大きいと考える。

乳がんと診断された患者は、ライフサイクルに関連した課題に対処しながら、複雑で多様化している治療を受けることになり、患者ニーズも複雑で多様化している可能性がある。患者ニーズに適した看護を実施するためには、治療を受ける患者は、どのような苦悩を抱えながら社会生活を送っているのかという実情を把握し、ライフサイクルに合わせた看護を検討して実践する必要があると考える。そこで本研究では、治療を受ける乳がん患者のライフサイクルに関連した経験や思いを明らかにし、ライフサイクルに応じた看護支援を検討することを目的とする。

II. 方法

1. 調査方法

調査期間を平成29年9月下旬～平成29年12月下旬とし、治療目的でA病棟に入院した20～80歳代の乳がん患者を対象に、順次、質問紙調査と面接調査の依頼を行った。ライフサイクルに関連した課題に対処しながら治療を受けるにあたっての経験や思いの把握を目的とした面接調査の対象は、乳がん罹患率が増加しライフイベントが多い30～60歳代とした。各年代3名とし、3名に達した年代の患者には質問紙調査のみ協力依頼を行った。

1) 質問紙調査

質問項目は、年代、入院目的、治療や入院に際して生活の側面で「調整が必要と感じたこと」や「困難を感じたこと」の有無であり、有りを選択した場合は具体的な内容と対処法の自由記載を求めた。生活の側面の選択項目は、『仕事について』『結婚について』『妊娠について』『育児につ

いて』『子どもについて』『介護について』『遺伝について』『外見の変化について』『家庭について』『パートナーとの関係』『性について』『治療について』『その他』の13項目とし、複数回答可とした。

2) 面接調査

退院が決定してから退院日までの間に半構成的面接調査を個別で行った。面接内容は、乳がんと診断されてから入院するまでの生活で、結婚、妊娠、出産、育児、就業、介護などのライフサイクル上の出来事に伴う困ったことや対処法、思いなどとした。面接内容は録音して逐語録に起こしてデータとした。

2. 分析方法

1) 質問紙調査

得られた質問紙の回答は年代ごとに分類し、選択肢は単純集計した。また、具体的な内容と対処法の自由記載については、看護支援を検討するためには実情をありのまま分析する必要があると考え、困りごとと対処法は分けずに対象者の記述を残しながら要約し、意味内容の類似性で分類した。

2) 面接調査

面接内容の逐語録を熟読し、個別分析を行った。ライフサイクル上の出来事に伴う経験や思いに関係する部分を抽出し、対象者の語りにあらわされている実情のありのままを壊さないように要約した。個別分析で得られた要約を年代ごとに集約し、意味内容の類似性で分類した。

3. 倫理的配慮

対象患者に、質問紙調査と面接調査の依頼を文書を用いて口頭で説明した。質問紙調査に協力同意の意思がある場合は、回答した質問紙を病棟内に設置した回収箱に投函するように依頼した。質問紙調査は無記名とし、封筒に封入した質問紙の回収箱への提出をもって研究参加の同意を得た。面接調査に協力同意の意思がある場合は、面接調査同意書を封筒に封入して、病棟内に設置した回収箱に投函するように依頼し、面接の日程を患者の希望に添って決定した。面接調査の同意が得られた患者の面接は個室で行い、プライバシーを確保した。本研究は、岐阜県立看護大学研究倫理委員会において平成29年7月に承認を得て（承認番号0184）、岐阜県総合医療センター倫理委員会

において平成 29 年 9 月に承認を得て実施した(承認番号 326)。

Ⅲ. 結果

1. 質問紙調査

45 部配布して 41 部が回収された(回収率 91.1%)。

1) 対象者の概要

年代ごとの内訳は、30 歳代は 2 名(4.9%)、40 歳代は 13 名(31.7%)、50 歳代は 7 名(17.1%)、60 歳代は 8 名(19.5%)、70 歳代は 8 名(19.5%)、80 歳代は 3 名(7.3%)であり、入院目的は、手術 39 名、化学療法 1 名、その他 1 名であった。

2) 調整が必要と感じたことや困難を感じたことと対処法

生活の側面の選択項目を『 』、自由記載の分析で得られた分類名を【 』で示して、年代ごとの結果を以下に述べる。

30 歳代が調整の必要性や困難を感じたことは、『仕事について』『育児について』『子どもについて』『外見の変化について』『治療について』であり、各 1 名であった。調整が必要と感じたことや困難を感じたことと対処法を表 1 に示す。【子どもの日常生活にあわせて、夫や親に育児を依頼】【職場での病名の伝え方や今後の働き方に対する不安】【診断や外見の変化に耐える自信のなさ】であった。

40 歳代が調整の必要性や困難を感じたことは、『仕事について』『子どもについて』は各 9 名、『家庭について』は 5 名、『外見の変化について』は 3 名、『育児について』は 2 名、『結婚について』『介護について』『遺伝について』は各 1 名であった。調整が必要と感じたことや困難を感じたことと対処法を表 2 に示す。【家族成員の状態に合わせて負担をかけないように調整しながら協力して行う家事と育児】【治療と仕事を継続するため

の職場との調整】【子どもへの遺伝の心配】などの 7 分類に集約された。

50 歳代が調整の必要性や困難を感じたことは、『治療について』は 3 名、『仕事について』『子どもについて』『介護について』『遺伝について』『外見の変化について』『家庭について』は各 2 名、『パートナーとの関係』は 1 名であった。調整が必要と感じたことや困難を感じたことと対処法を表 3 に示す。【家事や育児を夫に依頼】【家族に負担をかけない気遣い】【親の介護をしながら治療を受けることが困難】などの 9 分類に集約された。

60 歳代が調整の必要性や困難を感じたことは、『仕事について』は 4 名、『外見の変化について』『家庭について』『治療について』は各 3 名、『子どもについて』『介護について』は各 2 名、『遺伝について』『パートナーとの関係』は各 1 名であった。調整が必要と感じたことや困難を感じたことと対処法を表 4 に示す。【夫に不便をかけない気遣い】【親の介護が困難】【病気や治療に対する不安】【術後乳房への思い】などの 10 分類に集約された。

70 歳代が調整の必要性や困難を感じたことは、『仕事について』『外見の変化について』『家庭について』『治療について』は各 2 名、『遺伝について』は 1 名であった。調整が必要と感じたことや困難を感じたことと対処法を表 5 に示す。【家事に対する気がかり】【仕事の継続を希望】【周囲への言い出しにくさ】【子どもが遺伝について心配すること】などの 6 分類に集約された。

80 歳代が調整の必要性や困難を感じたことは、『家庭について』が 1 名であった。困りごとや調整したことは、【家事を孫が実施】であった。

2. 面接調査

1) 対象者の概要

対象者の概要を表 6 に示す。対象者は 30 歳代～60 歳代の合計 11 名であり、全員が手術療法を目的とした入院であった。面接時間は 1 人あたり

表1. 30歳代の調整が必要と感じたことや困難を感じたことと対処法

n=2

分類	要約
子どもの日常生活にあわせて、夫や親に育児を依頼	離れたことのない子どもの保育園や学校のことが気になり、下の子は母親に預け、上の子は夫にみてもらうようにした
職場での病名の伝え方や今後の働き方に対する不安	病名や事情を仕事関係者にどう伝えるか悩んだが、仕事で迷惑をかける人には伝えるようにした 退院後に今までと同じような働き方ができるか不安があった
診断や外見の変化に耐える自信のなさ	しこりを見つけてから病院に行くまでなかなか覚悟ができず、同じ病気の親戚に話を聞きに行った 胸がないことに耐える自信がなく、同時再建をお願いした

表2. 40歳代の調整が必要と感じたことや困難を感じたことと対処法

n=13

分類	要約
家族成員の状態に合わせて負担をかけないように調整しながら協力して行う家事と育児	子どもが小さいため、入院前に夫に家事に慣れてもらい、入院期間の見通しが立たない中、夫1人で家事を負担してもらった
	家事は配偶者に依頼し、両親にも協力を依頼した
	子ども3人の世話を夫1人で行うのは大変だと思い、母親に来てもらい、面倒をみてもらっている
	母親が泊まり込みで息子の面倒・家事などを引き受けてくれ、夫も入浴や寝かしつけに協力してくれた
	子どもの習い事の送迎は夫がやってくれる
	子どもの学校のこと、習い事の送迎は夫や両親に協力を依頼する
	学校行事を避けて入院する時期を決定するようにし、夫や両親の負担が最小限になるようにした
家族のライフサイクルにあわせて、家事を夫や子どもに依頼	幼い子どもの世話を両親が高齢で体調不良のために（面会時間が長くなり、子どもが騒ぐ可能性があることから）大部屋では困ったが、個室対応してもらって助かった
	（子どもが小さいため、入院中）テレビ電話を使って子どもの顔を見て話せるようにした
友人や学校に病状を知らせ、子どもへの対応を依頼	子どもが大きいこと、両親が高齢であることから、入院中の家事は配偶者と子供に頑張ってもらうことにした
	実家が遠方で、周りに手助けしてくれる人がおらず、夫に家事や送迎を依頼し、小学生の子どもに鍵を持たせた食事の用意は子どもに手分けしてやってもらった
治療と仕事を継続するための職場との調整	子どもの送迎は友人にお願いした
	子どもの学校行事があると、自分の病状を（他者に）話さなければならない状況となる
	子どもの学校の担任に事情を話し、行事のとき対応してもらった
	手術からのくらい仕事を休めばいいかわからなかったため、10日休みをもらい、その後は職場と相談する予定になっている
	仕事を長期間休むことになるため、所属長と何度も調整し、病欠・有休で補った
	病理検査結果によって治療法が決まってから、再び休暇をとる必要があるため、今後も仕事の調整が必要である
	診察にかかる時間や回数が多く、職場に申し訳なさを感じた
病気、治療、外見の変化への不安についての相談、情報収集	長期治療が必要なことは理解しているが、どのくらい仕事を休む必要があるのか分からず、今後の働き方を考えなければならず不安である
	重い物を持つことがある仕事であり、治療に伴う休暇もとる必要があるため、仕事を辞めた方がいいか悩み、社長に相談した
	他者にお手伝いできない仕事は事前に済ませて入院した
	部署の責任者のため、入院中も会社からの連絡があり、電話やメールで指示した
子どもへの遺伝の心配	告知後は不安になり、来院回数が減ることの方が不安で、外来看護師に相談に乗ってもらった
	全摘のため外見が気になっていたが、補正下着のパンフレットだけではよくわからず、看護師に教えてもらって助かった
	副作用の不安について誰に相談していいかわからなかったが、病院のスタッフが相談ののってくれて、理解するまで説明してくれた
ライフプランの変更	乳房再建についてインターネットで調べた
	初診から治療方針決定までに時間がかかるが、治療方針決定してから入院までの時間は短いため、歯科治療など準備が必要なことは前もって知りたかった
	娘への遺伝に関して心配であり、気をつけて検診を受けるようにしたい
	治療が終わってからの不安と落ち着かないため、結婚を延期してもらった

表3. 50歳代の調整が必要と感じたことや困難を感じたことと対処法

n=7

分類	要約
家事や育児を夫に依頼	子どもの弁当作りや送迎は夫がやってくれた
家族に負担をかけない気遣い	家事を行っていない夫だけの生活になることが不安であり、家事や犬の世話を夫に覚えてもらった
	家事はすべて自分が行っていたため、家族が負担なのではないかと思う
親の介護をしながら治療を受けることが困難	家族の食事が心配で、作り置きの料理を用意したところ、家族から喜んでくれた
	治療のため、高齢の両親のところに通えないことを、両親にどのように説明しようか悩む
仕事を休むための業務調整	義母や認知症の義父の介護を優先し、義父が亡くなった後、治療を始めることにした
	手術を早くした方が良いと勧められても、父の介護があったため手術日を決められなかった
復職の見通しが立たないことによる不安	仕事を休むにあたり、事前処理や仕事関係者への説明とスケジュール調整を行った
通院の協力を夫に依頼	仕事を休む段取りや治療による体のダメージがわからないため、仕事は当面休み、どのようなペースで再開するか不安である
術前の検査の苦痛	通院に夫の協力が必要なため、夫の職場の理解と協力があって助かった
外見や日常生活の変化に対する不安	術前に生検を受けるときの姿勢が辛く、検査後は腕が痛くなった
	術後は両手があげられず、重い物も持てないので日常生活に不安があるが、夫には負担をかけたくない
子どもへの遺伝の心配	夫の荷物になってしまうと思う
	娘がいるので遺伝が心配である
	乳がんと診断されたことで娘への遺伝が心配になり、乳がん検診の必要性を伝え、受診をすすめた

表4. 60歳代の調整が必要と感じたことや困難を感じたことと対処法

n=8

分類	要約
夫に不便をかけない気遣い	在職中である夫に不便をかけないようにしたい
親の介護が困難	親の介護に通っているが、それをどうするか困り、兄姉に依頼した 介護が困った
病気や治療に対する不安	家族に心配をかけたくないので、夫以外には病気のことを伝えず、自分で抱え込んで憂鬱だった 手術まで2か月以上待ったため疲れた 最終結果が出ていないこと、情報がありすぎることから、治療に対する不安がある 術後、毎日不安で自分がコントロールできないため、誰かに話を聞いてもらい、気持ちを明るくと思っている どのくらい療養期間が必要で、どの程度の体力に戻るのか心配だった
術後乳房への思い	乳房切除後のイメージができず術後に見たときの心配があった 術後の乳房をどうするか、認定看護師に相談したい 両側全切除後に再建をするかどうか、迷っている
休暇の調整	パートのため仕事を長期にわたり休めるのかどうか心配である 自営業の手伝いを今後できるかわからないため、アドバイスがほしい
復職に対する心配	パートのため仕事に復帰できるのかどうか心配だった 仕事に繁忙期があることと、どれくらいで復帰可能かが気になる
仕事の軽減	医師から治療のスケジュールを聞いて、仕事を軽減する方向に進めた
収入や社会保障	パートのため仕事を休んでいる間の収入や生活費の保障があるか心配で、社会保険労務士に相談し、安心することができた がん保険に入っていなかったため医療費の支払いについて心配だった
子どもが遺伝について心配すること	遺伝に対して娘が不安に思うことが気がかりである
子どもが一人になることへの不安	娘が一人になったらどうしようという不安がある

表5. 70歳代の調整が必要と感じたことや困難を感じたことと対処法

n=8

分類	要約
家事に対する気がかり	家事ができないことが気がかりだった 夫の家事が心配だったが、何とかできるので心配なかった 家事をすることに納得していない夫に、家事の説明することが面倒だった
仕事の継続を希望	仕事を続けていきたいと思っており、できるだけ早く仕事に復帰できるように頑張りたい
周囲への言い出しにくさ	家族や世間に（病気のことを）言い出しにくい 周囲に知らせずに入院した
術後の生活に対する不安	術後の生活について不安が残っている
遠方からの通院治療に対する気がかり	治療が長期にわたるため遠方からの毎日の通院をどうしようか考え中である
子どもが遺伝について心配すること	娘に遺伝の心配をかけてしまった

表6. 対象者の概要

対象者	年齢	術式	家族背景
A氏	30歳代	右乳房切除術+SN+乳房再建術	夫、子ども2名（幼児と小学生）
B氏	30歳代	右乳房切除術+SN+乳房再建術	独身、親と同居
C氏	40歳代	左乳房切除術+乳房再建術	夫、子ども3名（小学生、中学生、高校生）
D氏	40歳代	左乳房切除術+SN+乳房再建術	夫、子ども2名（幼児）
E氏	40歳代	右乳房部分切除術+SN	夫、子ども3名（中学生、社会人）
F氏	50歳代	左乳房切除術+SN	夫、子ども2名（大学生）
G氏	50歳代	左乳房切除術+リンパ節郭清術	夫、子ども3名（高校生、社会人）
H氏	50歳代	左乳房切除術+SN	夫、子ども2名（社会人）
I氏	60歳代	右乳房切除術+SN+乳房再建術	子ども2名（社会人）
J氏	60歳代	両側乳房切除術+SN	夫、子ども1名（社会人）
K氏	60歳代	左乳房切除術+リンパ節郭清術	独身

註) SN：センチネルリンパ節生検

26～63分であり、平均42分であった。8名は配偶者と子どもがおり、9名は仕事をしており、1名は乳がん罹患前に退職し、1名は専業主婦だった。

2) 年代ごとのライフサイクル上の出来事に伴う経験や思い

年代ごとのライフサイクル上の出来事に伴う経験や思いを表7に示す。要約を〈 〉、分類名を[]で示し、以下に年代ごとのライフサイクル上の出来事に伴う経験や思いを示す。

30歳代のライフサイクルに伴う経験や思いの要約は23得られ、11の意味に分類された。[子どもの生活が乱れないように調整]には、〈就学前の子どもは実母に預けて実家から保育園に通えるようにした〉などが含まれた。[子どもの思いに配慮した術式選択]には、〈プールやお風呂で子どもが見た時、心配するだろうと思って再建術をすることにした〉が含まれた。[子どもへの伝え方の難しさ]には〈乳房切除を聞いた子どもが、乳房が無くなることを心配していた〉などが

含まれた。[乳房喪失よりも生存できることが大事]には、〈入院決定後は、乳房喪失を嫌と思うことは無く、生きて帰れることが嬉しかった〉が含まれた。[頼れる友人のありがたさ]には、〈相談した友人から、子どもの運動会や遠足の弁当づくりの申し出があり、ありがたかった〉などが含まれた。[退院後の家事を家族が手伝うことを期待]には〈退院後は、家事を夫や子どもになるべく手伝ってもらおうと思っている〉を含み、[独身であることによる不安がない生活]には〈独身で実家暮らしであるため、生活の不安はなかった〉を含み、[仕事に関する心配事がないことのありがたさ]には〈仕事は休んでいるため退院後に仕事の心配が無いことはありがたい〉などを含み、[生計のために仕事の継続が必要]には〈生活がかかっているので仕事を辞めることは考えていない〉を含み、[職場で相談しやすいのは女性の同僚]には〈職場の一番話しやすい女性の同僚に最初に打ち明けた〉が含まれた。[治療と仕事を両立させるための苦悩]には〈術後、右手を酷使しないようにパソコン入力の仕事ができるか不安である〉などが含まれた。

40歳代のライフサイクルに伴う経験や思いの要約は41得られ、18の意味に分類された。[夫の支えのありがたさ]には〈検診で発見されて、がん＝死という印象で落ち込み、子どもには話せず、夫と落ち込んだ〉などが含まれた。[夫の仕事に影響することへの気がかり]には〈自分の状態が落ち着かなければ、夫が仕事で単身赴任できない〉が含まれた。[子どもの年齢に合わせた対応の必要性]には〈子ども達の年齢に合わせた親としての関わりが必要な状態であった〉が含まれた。[子どもの世話の依頼先が必要]には〈実家の母に子ども達の面倒をみてもらった〉などが含まれ、[家事を行う夫以外の家族が必要]には〈夫の仕事の状態では家事との両立は無理だと思い、実母に協力依頼を行った〉が含まれた。[子どもへの伝え方の難しさ]には〈高校生と中学生の息子には手術決定時に話せたが、小学生の娘には入院ギリギリまで話せなかった〉などが含まれ、[子どもの反応による辛さ]には〈化学療法による脱毛で子どもがショックを受けることが辛い〉が含まれた。[子どもの社会生活に影響させない

努力]には〈子どものためにも、子どもの母親仲間には健康な状態を見せたかった〉などが含まれ、[子ども繋がり母親仲間のありがたさ]には〈子どものクラブ活動の送迎を依頼できた母親仲間感謝している〉などが含まれた。[子どもなりの対処を認識]には〈一番下の中学生のことを心配したが、手が離れた3人の子ども達なりに過ごしているようだ〉などが含まれた。[子育てにお金が必要であることから復職希望]には〈子どものクラブ活動用具の買い換えなどにお金が必要なので復職したい〉が含まれた。[再就職に対する不安]には〈再建術終了前に再就職する勇気がない〉などが含まれ、[職場の対応による安心感]には〈職場の臨機応変な対応で治療に専念でき、有給休暇後、復職しようと思っている〉などが含まれ、[仕事と治療の両立のための努力と苦悩]には〈一番気がかりだった仕事は、確定診断前から上司に報告して仕事の調整を行った〉などが含まれた。[家族への申し訳なさ]には〈入院前の期間、自分が不安定になったため家族に心配をかけた〉が含まれ、[母の手助けのありがたさ]には〈県外在住の母に相談したところ、手伝いに来ると言ってくれたので頼った〉などが含まれた。[親の体調に配慮した対応]には〈要介護である義理の両親には心配させないために病気のことには知らせていない〉などが含まれた。[存在価値を感じることの重要性]には〈家が綺麗なのは自分のおかげと自分の存在価値を感じることは大事である〉が含まれた。

50歳代のライフサイクルに伴う経験や思いの要約は40得られ、21の意味に分類された。[入院中の仕事の調整]には〈今、抱えている仕事を休むための説明や段取りに時間を要した〉などが含まれ、[仕事復帰が見通せないことの辛さ]には〈術後補助療法が決定しなければ、仕事復帰できる時期が分からないことが今一番の課題である〉などが含まれ、[治療と仕事を両立する方法を検討]には〈退院後は仕事を辞めるのではなく、仕事量を減らしていこうと思う〉などが含まれ、[子どもの思いを優先したペースでの仕事と治療の両立]には〈化学療法で倦怠感が生じる時期は、子どもにかわいそうな思いをさせないようなペースを掴んで仕事と家事を両立した〉が含ま

れた。[成人して自立した子どもは心配の対象外]には〈2人の大学生の子ども達は自立しているため、手がかかる心配は無い〉が含まれ、[入院を機に願う子どものさらなる自立]には〈大学生の息子が自分の入院を機に自立してくれると良いと思う〉が含まれ、[母親の病気を機に成長する子ども]には〈化学療法で動けなくなったとき、2人の子どもが家事を行ってくれた〉などが含まれた。[子どもに病気のことを告げることの難しさ]には〈子どもに病気と治療のことを順次告げたが、高校生の娘は嫌みを言ったり複雑な反応をした〉などが含まれた。[子育て後の自分の人生と意味づけられている仕事]には〈子どもが自立したため、自分のことに集中できる仕事中心の生活をしている〉が含まれた。[親に病気のことを伝える難しさ]には〈兄と暮らしているひとり親には心配させないために伝えず、自立して生活している義理の両親には伝えた〉などが含まれ、[少し介護が必要な義父の存在]には〈二世帯で暮らしている舅が胃がんの手術後、少し介護が必要な状態であり、デイサービスが開始となった〉が含まれ、[娘役割と嫁役割の両立が必要]には〈長女であり実家の近くに嫁に来たことで、両方の親を看なければいけない雰囲気がある〉などが含まれ、[親の介護ができなくなることへの不安]には〈自分と夫の両方の親の介護をしなければならぬため、病気になって介護できなくなると困る〉が含まれた。[患者を支える家族の存在]には〈夫と娘と3人で病状説明を受けて、やれることをやると3人で淡々と受け止めた〉などが含まれた。[家庭や仕事の忙しさによる発見の遅れ]には〈家庭や仕事の忙しさから疲れだろうと様子を見ていて、気付いた時のしこりは大きかった〉が含まれ、[家庭内での存在意義の揺らぎ]には〈病気になったことで、家族の中のお荷物になっているように思う〉が含まれた。[夫の支えのありがたさ]には〈夫がパソコンで検索したり職場で乳がん体験者の話を聞いたりして、情報収集をして教えてくれる〉などが含まれ、[がん罹患で変化するとされる夫婦関係]には〈家業ができなくなったうえ、面倒を看なければいけない自分のことをお荷物と夫は感じていると思う〉が含まれた。[女性の象徴である胸を失うことへの気持

ちの男女差]には〈娘は胸を無くすことの気持ちを分かってくれるが、夫や息子は分からないと思う〉が含まれた。[経済上の問題に対処できることのありがたさ]には〈生命保険に入っていて助かった〉が含まれた。[がん治療中の母を持つ子どもの気晴らしを黙認できない義母]には〈母親ががん治療中という子どもにとっても非日常の苦しい状況だと思う為、溜めずに吐き出させたいが、義母が子どもに注意してしまう〉が含まれた。

60歳代のライフサイクルに伴う経験や思いの要約は26得られ、12の意味に分類された。[子どもが仕事を休んで同伴受診]には〈がんと診断後、長女が治療する病院を調べて仕事を休んで連れてきてくれた〉が含まれた。[生きることの意味を模索]には〈周りに迷惑をかけながら生きる意味はないと考えるようになった〉が含まれた。[気になる術後の活動制限]には〈娘の手伝いをするために、普通に挙手や仕事ができるのかが気になる〉などが含まれた。[持病を持ちながらの治療に対する不安]には〈腎臓がんの術後の経過観察もあるため、乳がんの今後の治療が複雑であると嫌だと思う〉が含まれ、[親族に迷惑をかけるための配慮]には〈それぞれ家庭がある家族を巻き込まないために、病気の相談はしない〉などが含まれた。[頼れる人がいない状態]には〈パートナーや友人はいるが、頼れる人はいない状態である〉などが含まれた。[親の介護調整]には〈高齢の母の介護を兄弟に代わってもらった〉などが含まれ、[夫に不便をかけることが気になり]には〈入院中、夫が不便なのではないかと気がかりだった〉が含まれた。[遺伝の可能性を認識]には〈娘が遺伝を気にしていたことが気がかりである〉〈女きょうだいに病名を伝えたことで遺伝の不安を与えたことが気がかりである〉などが含まれた。[仕事先に迷惑がかからないように配慮]には〈パートの仕事先に迷惑がかからない時期に入院した〉などが含まれ、[治療と仕事の両立の検討]には〈今の状態なら事務仕事なので続けられるが、今後の治療次第では検討が必要だと思う〉などが含まれ、[仕事を失う可能性の心配]には〈傷病手当で休んで解雇されないか心配である〉などが含まれた。

IV. 考察

1. 治療を受ける乳がん患者のライフサイクルに関連した実情

質問紙調査結果から、30～70歳代の全ての年代で、「調整が必要と感じたこと」や「困難を感じたこと」として『仕事について』を挙げていたことが分かった。

30歳代は、【職場での病名の伝え方や今後の働き方に対する不安】を挙げていた。面接では、[治

療と仕事を両立させるための苦悩]として、〈術後、右手を酷使しないようにパソコン入力の仕事ができるか不安である〉〈職場での支援を求めるために、乳がん罹患したことを職場の誰に伝えておけばよいか悩んだ〉などが語られている一方で、〈生活がかかっているので仕事を辞めることは考えていない〉といった語りもあった。30歳代は、職場で仕事を覚え始めて慣れてきてキャリアアップしようとしている時期であると考えら

表7. 年代ごとのライフサイクル上の出来事に伴う経験や思い

年代	分類	要約
30歳代	子どもの生活が乱れないように調整	就学前の子どもは実母に預けて実家から保育園に通えるようにした/小学生の子どもは夫と自宅で生活して、食事は実家で摂れるようにした/ 他1件
	子どもの思いに配慮した術式選択	プールやお風呂で子どもが見た時、心配するだろうと思って再建術をすることにした
	子どもへの伝え方の難しさ	乳房切除を聞いた子どもが、乳房が無くなることを心配していた/母の体を心配する子どもの質問に、隠す事無く普通に乳房切除の話をした/ 他1件
	乳房喪失よりも生存できることが大事	入院決定後は、乳房喪失を嫌と思うことは無く、生きて帰れることが嬉しかった
	頼れる友人のありがたさ	相談した友人から、子どもの運動会や遠足の弁当づくりの申し出があり、ありがたかった/入院に関する相談を行った友人から何でもすると連絡があり、ありがたいと思う
	退院後の家事を家族が手伝うことを期待	退院後は、家事を夫や子どもになるべく手伝ってもらおうと思っている
	独身であることによる不安がない生活	独身で実家暮らしであるため、生活の不安はなかった
	仕事に関する心配事がないことのありがたさ	仕事は休んでいるため退院後に仕事の心配が無いことはありがたい/ 他1件
	生計のために仕事の継続が必要	生活がかかっているので仕事を辞めることは考えていない
	職場で相談しやすいのは女性の同僚	職場の一番話しやすい女性の同僚に最初に打ち明けた
	治療と仕事を両立させるための苦悩	術後、右手を酷使しないようにパソコン入力の仕事ができるか不安である/職場での支援を求めるために、乳がん罹患したことを職場の誰に伝えておけばよいか悩んだ/ 他5件
	夫の支えのありがたさ	検診で発見されて、がん=死という印象で落ち込み、子どもには話せず、夫と落ち込んだ/精神状態が不安定だった時は、付き添えるように夫が職場に交渉してくれた/ 他3件
	40歳代	夫の仕事に影響することへの気がかり
子どもの年齢に合わせた対応の必要性		子ども達の年齢に合わせた親としての関わりが必要な状態であった
子どもの世話の依頼先が必要		実家の母に子ども達の面倒をみてもらった/ 他2件
家事を行う夫以外の家族が必要		夫の仕事の状態では家事との両立は無理だと思い、実母に協力依頼を行った
子どもへの伝え方の難しさ		高校生と中学生の息子には手術決定時に話せたが、小学生の娘には入院ギリギリまで話せなかった/小学生の娘には、一緒にお風呂に入って話し、ショックを受けてはいたが、納得してくれた/ 他3件
子どもの反応による辛さ		化学療法による脱毛で子どもがショックを受けることが辛い
子どもの社会生活に影響させない努力		子どものためにも、子どもの母親仲間には健康な状態を見せたかった/ 他2件
子ども繋がり母親仲間のありがたさ		子どものクラブ活動の送迎を依頼できた母親仲間感謝している/子どもが小さい時から繋がっている母親達なので頼みやすく助かった
子どもなりの対処を認識		一番下の中学生のことを心配したが、手が離れた3人の子ども達なりに過ごしているようだ/中学生の次男は買いためておいた物を食べているようだ
子育てにお金が必要であることから復職希望		子どものクラブ活動用具の買い換えなどにお金が必要なので復職したい
再就職に対する不安		再建術終了前に再就職する勇気がない/先が見えてからでなければ再就職は考えられない
職場の対応による安心感		職場の臨機応変な対応で治療に専念でき、有給休暇後、復職しようと思っている/ 他1件
仕事と治療の両立のための努力と苦悩		一番気がかりだった仕事は、確定診断前から上司に報告して仕事の調整を行った/職場の関係者に状況を説明して自分ができない仕事を依頼してきた/ 他3件
家族への申し訳なさ	入院前の期間、自分が不安定になったため家族に心配をかけた	
母の手助けのありがたさ	県外在住の母に相談したところ、手伝いに来てと言ってくれたので頼った/ 他1件	
親の体調に配慮した対応	要介護である義理の両親には心配させないために病気のことは知らせていない/病気の母に心配をかけないために、母の前では泣いてはいけないと思っていた/ 他1件	
存在価値を感じることの重要性	家が綺麗なのは自分のおかげと自分の存在価値を感じることは大事である	

表7. 年代ごとのライフサイクル上の出来事に伴う経験や思い つづき

年代	分類	要約
50歳代	入院中の仕事の調整	今、抱えている仕事を休むための説明や段取りに時間を要した/ 他2件
	仕事復帰が見通せないことの辛さ	術後補助療法が決定しなければ、仕事復帰できる時期が分からないことが今一番の課題である/仕事をしていた今までの生活に戻りたいが、今後の治療次第で戻れないかもしれないことが不安である
	治療と仕事を両立する方法を検討	退院後は仕事を辞めるのではなく、仕事量を減らしていこうと思う/ 他2件
	子どもの思いを優先したペースでの仕事と治療の両立	化学療法で倦怠感が生じる時期は、子どもにかわいそうな思いをさせないようなペースを掴んで仕事と家事を両立した
	成人して自立した子どもは心配の対象外	2人の大学生の子ども達は自立しているため、手がかかる心配は無い
	入院を機に願う子どものさらなる自立	大学生の息子が自分の入院を機に自立してくれると良いと思う
	母親の病気を機に成長する子ども	化学療法で動けなくなったとき、2人の子どもが家事を行ってくれた/ 他2件
	子どもに病気のことを告げることの難しさ	子どもに病気と治療のことを順次告げたが、高校生の娘は嫌みを言ったり複雑な反応をした/ 他2件
	子育て後の自分の人生と意味づけられている仕事	子どもが自立したため、自分のことに集中できる仕事中心の生活をしている
	親に病気のことを伝える難しさ	兄と暮らしているひとり親には心配させないために伝えず、自立して生活している義理の両親には伝えた/ 他2件
	少し介護が必要な義父の存在	二世帯で暮らしている舅が胃がんの手術後、少し介護が必要な状態であり、デイサービスが開始となった
	娘役割と嫁役割の両立が必要	長女であり実家の近くに嫁に来たことで、両方の親を看なければいけない雰囲気や親戚にある/ 実の親の面倒をみ終わった頃、病気になるまで独身の兄の面倒をみていた頃、義母が脳梗塞で倒れた
	親の介護ができなくなることへの不安	自分と夫の両方の親の介護をしなければならないため、病気になるまで介護できなくなると困る
	患者を支える家族の存在	夫と娘と3人で病状説明を受けて、やれることをやると3人で淡々と受け止めた/ 他4件
	家庭や仕事の忙しさによる発見の遅れ	家庭や仕事の忙しさから疲れだろうと様子を見ていて、気付いた時のしこりは大きかった
	家庭内での存在意義の揺らぎ	病気になることで、家族の中のお荷物になっているように思う
	夫の支えのありがたさ	夫がパソコンで検索したり職場で乳がん体験者の話を聞いたりして、情報収集をして教えてくれる/お金よりも治すことに価値を置いている夫の言葉がありがたかった/ 他2件
	がん罹患で変化すると思われる夫婦関係	家業ができなくなったうえ、面倒を看なければいけない自分のことをお荷物と夫は感じていると思う
	女性の象徴である胸を失うことへの気持ちの男女差	娘は胸を無くすことへの気持ちを分かってくれるが、夫や息子は分からないと思う
	経済上の問題に対処できることへのありがたさ	生命保険に入っていて助かった
がん治療中の母を持つ子どもの気晴らしを黙認できない義母	母親ががん治療中という子どもにとっても非日常の苦しい状況だと思う為、溜めずに吐き出させたいが、義母が子どもに注意してしまう	
子どもが仕事を休んで同伴受診	がんと診断後、長女が治療する病院を調べて仕事を休んで連れてきてくれた	
生きることの意味を模索	周りに迷惑をかけながら生きる意味はないと考えるようになった	
気になる術後の活動制限	娘の手伝いをするために、普通に挙手や仕事ができるのが気になる/ 他2件	
持病を持ちながらの治療に対する不安	腎臓がんの術後の経過観察もあるため、乳がんの今後の治療が複雑であると嫌だと思う	
親族に迷惑をかけないための配慮	それぞれ家庭がある家族を巻き込まないために、病気の相談はしない/ 他1件	
頼れる人がいない状態	パートナーや友人はいるが、頼れる人はいない状態である/退院後も一人で生活する覚悟と準備をしている	
親の介護調整	高齢の母の介護を兄弟に代わってもらった/力仕事が必要な親の介護は継続する予定である	
夫に不便をかけることが気がかり	入院中、夫が不便なのではないかと気がかりだった	
遺伝の可能性を認識	娘が遺伝を気にしていたことが気がかりである/女きょうだいに病名を伝えたことで遺伝の不安を与えたことが気がかりである/ 他2件	
仕事先に迷惑がかからないように配慮	パートの仕事先に迷惑がかからない時期に入院した/ 他2件	
治療と仕事の両立の検討	今の状態なら事務仕事なので続けられるが、今後の治療次第では検討が必要だと思う/ 他3件	
仕事を失う可能性の心配	傷病手当で休んで解雇されないか心配である/リンパ浮腫発症で仕事ができなくなることが心配である	

れる。その為、治療を理由に辞めるのではなく、治療と仕事を両立させる方法を模索していると考えられる。

一方、40歳代は、仕事以外にも、『子どもにつ

いて』や『家庭について』に調整の必要性や困難を感じており、【家族成員の状態に合わせて負担をかけないように調整しながら協力して行う家事と育児】が挙げられていることから、小さな子ど

もの母親世代であると同時に家族成員の事情に配慮しながら生活調整を行う世代とも考えられる。[子育てにお金が必要であることから復職希望]には〈子どものクラブ活動用具の買い換えなどにお金が必要なので復職したい〉という語りが含まれていたことから、40歳代の女性にとって仕事は、子育てに必要な収入を得るという位置付けになっていると考えられる。家庭で母親役割を行いながら社会では労働者として役割を果たす時期に乳がんの治療を行うことは、多重課題とも言える新たな試練と考えられる。その為、〈県外在住の母に相談したところ、手伝いに来てと言ってくれたので頼った〉や〈子どものクラブ活動の送迎を依頼できた母親仲間に感謝している〉のように、自分の親や子ども繋がり母親仲間の協力を得ながら、治療と社会生活を維持していると考えられる。

50歳代は、妊娠出産の時期によって小さな子どもがいる場合もあれば、自立し始める中高生や成人した大学生の場合もあり、子育ての状況が多様な年代とも言える時期である。その為、[子どもの思いを優先したペースでの仕事と治療の両立]という意味の語りがある一方で、〈子どもに病気と治療のことを順次告げたが、高校生の娘は嫌みを言ったり複雑な反応をした〉という語りや〈子どもが自立したため、自分のことに集中できる仕事中心の生活をしている〉という語りもあり、母親としての悩みも多様な年代と言える。30歳代や40歳代で子育てに協力してくれていた親も歳をとり、[娘役割と嫁役割の両立が必要]として語られた〈実の親の面倒をみ終わった頃、病気になった独身の兄の面倒をみていた頃、義母が脳梗塞で倒れた〉という状態が生じる時期である。そのため、〈自分と夫の両方の親の介護をしなければならぬため、病気になって介護できなくなると困る〉という語り示すように、自分の乳がん治療と親の介護の両立をしながら仕事もしなければならないという状態となっていることがうかがえる。質問紙調査でも【親の介護をしながら治療を受けることが困難】という結果が得られている。以上の結果から、50歳代の女性のライフサイクルは、実子への親としての役割と親への娘・嫁としての介護役割が生じる年代であ

り、実子には親としての役割を果たしながら親には娘としての役割を果たすという1人の人間の中に生じる立場の違いという複雑性が生じていると考えられる。

60歳代は、〈がんと診断後、長女が治療する病院を調べて仕事を休んで連れてきてくれた〉という語りからもわかるように、子どもが自立して逆に面倒をみてもらう年代でもある。今まで子どもや夫を中心に生活していたが、〈周りに迷惑をかけながら生きる意味はないと考えるようになった〉という語り示すように、急に1人になったような気持ちになる時期と言える。親も高齢となるため、〈高齢の母の介護を兄弟に代わってもらった〉という語り示すように、家族内で[親の介護調整]が必要となってくる年代である。子育てと仕事を両立させながら生活することに必死であった30～50歳代では具体的に出なかった意見である【術後乳房への思い】が質問紙の自由記載に書かれていたことから、気持ちが自分の身体や健康に向く年代であり、〈娘の手伝いをするために、普通に拳手や仕事ができるのかが気になる〉の語りから推測できる母親役割を遂行しようという年代でもあると言える。

『遺伝について』は、40～70歳代で、質問紙調査の選択項目として挙げられて、40歳代で【子どもへの遺伝の心配】として挙げられてはいるものの、面接調査では具体的に語られなかった内容である。60歳代の面接調査では〈娘が遺伝を気にしていたことが気がかりである〉や〈女きょうだいに病名を伝えたことで遺伝の不安を与えたことが気がかりである〉と語られている。また、70歳代では、【子どもが遺伝について心配すること】が挙げられている。これらの結果からわかるように、60～70歳代は自分を中心とした周りへの影響として遺伝について真剣に考えるようになる年代とも言える。

渡邊(2021)は、外来通院で放射線療法を受ける成人期の乳がん患者と老年期の乳がん患者の主観的QOLを構成する領域の変化を明らかにしており、成人期では治療の前後ともに「仕事や経済」を多く認め、老年期は治療終了後に「健康」を意味する領域が挙げられたとしている。本研究の結果からも、30～50歳代は、生活の質向上の

ために仕事を重視していたが、60歳代は【病気や治療に対する不安】や【術後乳房への思い】が挙げられていることから、自身の健康に関心を向けることができていると考えられる。

2. ライフサイクルを意識した看護支援の必要性

患者の調査結果より、30歳代や40歳代の患者は、家事や子育てに調整が必要であり困難を感じていることが分かった。この年代は、子どもが小さいことが推測され、自分以外の子どもの世話をする協力者の存在が必要になる。その協力者の生活へのしわ寄せや子どもへの申し訳なさといった思いなど持ち合わせている可能性もあり、家族背景や協力状況など患者の思いを傾聴していくことが看護支援として必要であると考え。「仕事」に対する困難さは、各年代で高値を示しており、仕事と治療を両立できるような看護支援が必要であると考え。特に、40～50歳代は、社会的に多様な役割を担う年代であり、自分の外見の変化よりも家庭や職場の役割遂行に対して、困難や調整の必要性を感じていた。困ったことと調整したことの内容に【治療と仕事を継続するための職場との調整】がある。布施ら(2022)は、がん関連の専門・認定看護師と職場の両立支援担当者をパネリストとして実施した研修会において、患者に対してどのような支援をしているのかを病院側と職場側が理解し合うことで互いが協働できることを明らかにしている。患者を通じて、職場が求めている情報や職場ができる配慮を知ることにより、職場の両立支援担当者の考えを理解することに繋がる。さらに、患者から仕事内容を教えてもらうことにより、治療と両立できる対処法を検討することに繋がると考える。一方で本研究の面接結果で得られた40歳代の「子育てにお金が必要であることから復職希望」や50歳代の「子育て後の自分の人生と意味づけられている仕事」から分かるように、仕事との両立支援を検討する時も、年代ごとの家庭内の役割の変化を意識して患者と向き合うことが重要であると考え。

今回、乳がん患者のライフサイクルに伴う経験や思い、治療や入院に際して生活の側面で「調整が必要と感じたこと」や「困難を感じたこと」および具体的な内容と対処法を明らかにした。手術目的で入院した患者に対して、安全に手術を受

けて早期に退院できるように看護することは重要であるが、さらに、患者のライフサイクル上の課題や対処法を意識しながら患者の生活背景を傾聴し、ライフサイクル上の課題に応じた情報収集や情報提供を行うことが、ライフサイクルに合わせた看護支援となり、複雑で多様化している治療を受ける患者に対する継続看護に繋がると考える。

謝辞

本研究にご協力いただきました対象者の皆さまに深く感謝申し上げます。ご協力いただきました施設の職員の皆さまに御礼申し上げます。

本研究は、岐阜県立看護大学共同研究事業の助成を得て実施した。

本研究の一部は、第33回日本がん看護学会学術集会において示説発表を行った。

本研究における利益相反は存在しない。

文献

- 布施恵子, 梅津美香, 奥村美奈子ほか. (2022). がん患者の治療と仕事の両立支援を促進する人材育成プログラムに向けた取り組み. 岐阜県立看護大学紀要, 22(1), 61-71.
- 国立がん研究センター. (2021a). がん情報サービス. 2022-9-25. https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/cancer/14_breast.html
- 国立がん研究センター. (2021b). がん情報サービス. 2022-11-27. <https://ganjoho.jp/public/cancer/breast/treatment.html>
- 厚生労働省. (2021). 令和3年版働く女性の実情. 2022-11-27. <https://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/josei-jitsujo/21.html>
- 渡邊知子. (2021). 外来放射線療法を受ける乳がん患者のライフステージにおける主観的QOLを構成する領域の違い. 秋田看護福祉大学総合研究所研究所報, 16号, 8-17.